

異文化間コミュニケーション能力の育成を目指した教育実践 ——キャンパスの国際化をテーマとして——

中園 博美・佐藤 智照 (外国語教育センター)

1. はじめに

近年、国際共修を通じた学生の学びに関する研究が蓄積されつつある（松田 2024、中橋 2025 など）。翻って本学の状況を見ると、半年間の短期留学で在籍する交換留學生が増加しており、留學生と日本人學生の関係を、時間をかけて十分に構築することがこれまで以上に難しいという状況がうまれている。こうした変化もある中、留學生と日本人學生の交流を偶発的な機会に委ねるのではなく、互いに関わりを持ち継続的に関係を生み出す場として、国際共修授業を設定することは最も有効な方法の一つであると考えられる。しかしながら現時点において、本学には「国際共修」といったラベルを付して制度的に位置づけられた授業はなく、留學生と日本人學生が共に学ぶことを前提とし、その多様性を積極的に活かした教育内容の授業も十分に整備されているとは言い難い状況にある。一方で、本学は「大学教育におけるグローバル化推進のための基本方針」の中で、「2. 本学における留學生と日本人學生の交流の促進」を謳っている。そこで本実践では、留學生と対面する中で筆者らが抱えてきた課題意識を背景としながら、全学的な方策に資することも念頭において実施した、留學生と日本人學生が協働して学ぶ国際共修授業「異文化理解入門B」の教育的意義について検討することとした。

2. 授業開設の背景

留學生および日本人學生が共に学ぶ授業、いわゆる国際共修と呼ばれる授業「異文化理解入門」を、筆者ら日本語教育の主担当教員が長年にわたり後期に1科目開講してきたが、前期には同種の授業がなかった。交換留學生の多くが10月に来日することが、「異文化理解入門」を後期に開設していた理由のひとつであったが、コロナ禍以降は半年間の交換留學生が増え、4月に来日する學生も増加した。また、2023年度からは、帝京大学からの国内留學生の研修受け入れが開始され、前期に在籍する短期留學生が相対的に増えた。このような背景のもと、2023年度より「異文化理解入門B」を前期に新規開設した（既存の「異文化理解入門」は「異文化理解入門A」に名称変更）。以上のような事情から、受講する留學生の国籍・出身地、専攻、身分などの背景が一層多様化することになった。本稿ではこの「異文化理解入門B」の、2025年度の実践について報告し考察する。

3. 実践の内容

2025年度の受講生は、多様な背景をもつ留學生35名と日本人學生2名であった。留學生の国籍・出身地は中国、マレーシア、韓国、タイ、ブラジル、インドネシア、台湾と多岐にわたり、學生の所属は医学部を除くすべての学部で、その専攻分野も多様であった。

日本人学生は留学生に比べ極端に少なかったが、理由は不明である。

国際教育という時、しばしば英語を使った授業が強調されるが、本授業で用いる共通言語は基本的に日本語とした。その理由の一つは、留学生の多くは日本語を学ぶことを主目的としていることである。そのため、この授業の履修条件として日本語能力が中級レベル以上で、日本語でコミュニケーションやディスカッションができることを求めた。また、もう一つの理由は、日本人学生から見れば、外国語としての日本語を意識することで母語を新たに客観的な目でとらえ、道具として使う機会とするためである。

全15回の授業は、大きく前半と後半にわけて実施した。後半には、メンバーを固定した多国籍のグループでの、協働による課題解決型学習（Project-Based Learning、以下PBL）を行った。今年度のテーマは「島根大学キャンパスの国際化」とした。

3.1 ルーブリックの活用

授業全15回の前半では、多国籍の学生からなる4人グループを編成し、メンバーは固定せず、毎回異なる文化的・言語的背景を持つ学生同士が継続的に関わる機会を確保した。そして、冒頭でルーブリックを提示し、グループ学習活動の到達目標を学生と共有した。ルーブリックは、学生たちにその学習目標を明確に認識させ、自己の活動を振り返らせるためのものである。ルーブリックの作成にあたっては、欧州評議会が2016年に発表した「民主的文化能力のための参照枠（Reference Framework of Competences for Democratic Culture、以下RFCDC）」を参考にし、民主主義社会において市民に求められる知識、スキル、態度、価値観の中から、多様な他者との協働や市民性意識の醸成を意識して9つの観点を取り入れた。その観点は、1) 文化的多様性に対する価値観、2) 文化の異なりに対する寛大さ、3) 他者の尊重、4) 公德心・公共心、5) 世界についての体系的な知識と批判的な理解、6) 傾聴・観察のスキル、7) 言語的スキル・コミュニケーションスキル、8) 協調のスキル、9) 問題解決のスキルの9つである。図1は、授業で利用したルーブリックの一部である。

評価			評価				
	むずかしい	すこしできた	できた	傾聴・観察のスキル	むずかしい	すこしできた	できた
文化的多様性に対する価値観 ～対話の重要性の理解～ ～多様性の価値の理解～							
	社会の中の異なる信念を持った人々に対して寛容であるべきだという見解を持ち、周囲に働きかける。お互いを「違う」と感じているグループや個人間において、人は常に、有意義な対話を行い、相互理解を深める努力をすべきだという見解を持ち、周りに働きかける。 Promotes the view that we should be tolerant of the different beliefs that are held by others in society. Promotes the view that one should always strive for mutual understanding and meaningful dialogue between people and groups who are perceived to be "different" from one another.				異なる意見を注意深く聞く。他者(が話すこと)に注意を払って熱心に聞く。 Listens carefully to differing opinions. Listens attentively to other people.		

図1 ルーブリックの例

図1は英語訳が併記されている例である。このようにルーブリックでは日本語だけでなく、留学生の母語の各国語版シートも用意し、記述されている内容が確実に理解できるように配慮した。学生には、それらを意識して、グループの協働に取り組むよう促した。

3.2 授業の前半：ミニ講義とグループ活動

授業前半では、異文化間コミュニケーション能力において求められる知識、態度、スキルに関わる内容として、「見える文化」と「見えない文化」の区別や、相互文化的市民性、脱中心化といった概念を扱った。さらに、学習者自身が無意識に抱いているステレオタイプを認識し、それを相対化することも重要な要素として位置づけた。各回では、このような異文化間コミュニケーションの前提となる基本的な情報を講義形式で導入したのち、グループディスカッションへとつなぐ形で進めた。さらに、ダイバーシティ・マネジメントの視点を取り入れ、多様な背景を持つ他者と協働する際の姿勢や関わり方について考える活動を行った。その一環として、ヒューマンライブラリーの考え方を取り入れた異文化間対話の体験を組み込み、学生が「知識としての他者理解」ではなく、「対話を通じた他者理解」に向き合う機会を設けた。

これら一連の内容とグループ活動は、異文化に関する知識の習得のみを目的とするものではなく、他者と関わる際の認知の枠組みや態度、対話の前提を整えることを通して、異文化間コミュニケーションの土台を学生の中に築いていくことを意図したものである。

3.3 授業後半 (1)：課題解決型の協働学習「メッセージTシャツプロジェクト」

異文化間コミュニケーションに関する知識の習得と体験、そして、クラスメイトの多くと対話を重ね、一定の関係性が築かれてきた段階で、後半の課題解決型の協働活動へと移行した。前半の活動よりも一段階進んだ協働が求められるため、まずは教師主導によるPBL活動「メッセージTシャツプロジェクト」を行った。この活動は、最終的に自分たちで課題解決に向けた取り組みすべてを実施できるよう意図したものであり、いうなればPBLに向けたトレーニングの段階である。具体的には、「留学生と話そう」というイベントで着用するメッセージTシャツを協働でデザインし、クラス全体で意見を集約したうえで、実際にTシャツを制作する活動を実施した。この過程において、学生たちはデザインの発想、ディスカッション、合意形成といった要素を中心に、異文化間コミュニケーションの実践を行った。そして、活動の最後に、全員が同一のTシャツを着用し、同一時間帯にキャンパス内で交流活動を行った。

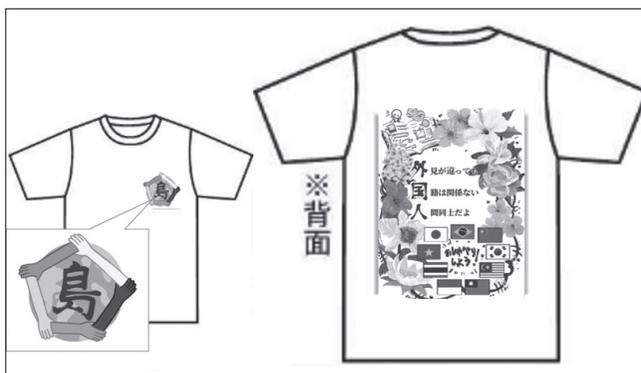


図2 最終的に選ばれたTシャツの前面（左胸）と背面のデザイン

図2に示したように、Tシャツのイラストにもメッセージにも、異文化間コミュニケーションを強く意識して考えられた結果がちりばめられている。学生たちはこのTシャツを着用して図書館前の広場にでかけ、キャンパスを歩く学生たちに話しかける「留学生と話そう」というイベントを実施した。単に話しかけることには難しさがあるので、自分が好きなモノ・コトをもとに作成した共感シートを利用し、相手に質問する形できっかけをつくりコミュニケーションを展開させていった。

3.4 授業後半 (2)：最終の課題解決型活動

ある程度の流れが設定されていたトレーニングとしてのPBL活動、「メッセージTシャツプロジェクト」を経て、学生たち自身に課題の発見からすべてが委ねられる最終的なPBL活動へと移行した。最終的なPBL活動は、新規開講した当初は学生自身が学内外を問わず、課題を探す形式をとっていたが、2025年度は「島根大学の国際化」というテーマを設定し、学内に目を向けさせる活動とした。グループメンバーは教員の恣意的な判断を介さず、ランダムに8グループを編成した。各グループで学内の現状を振り返り、島根大学の国際化における課題を発見するところからはじめ、解決策を検討した。その後、解決に向けて具体的な取り組みを企画し、実行するという一連の流れで活動を進めた。

3.5 「AS-IS/TO-BE分析シート」の活用

最初の段階として、学生たちはAS-IS/TO-BE分析を行った。AS-IS/TO-BE分析とは、現状(AS-IS)と目指す状態(TO-BE)を対比的に整理し、その差から課題や改善の方向性を明らかにする枠組みである(図3)。この枠組みを用いた活動用のシート(図3)を使い、課題を学生たちが自ら見出し、PBLに向けたアイデアや考えの共有を促すことを意図した。学生たちが見つけた課題には「日本人学生が消極的」、「継続した交流ができない」などがあったが、全グループに共通したのは「留学生と日本人学生との交流が少ない」という課題であった。

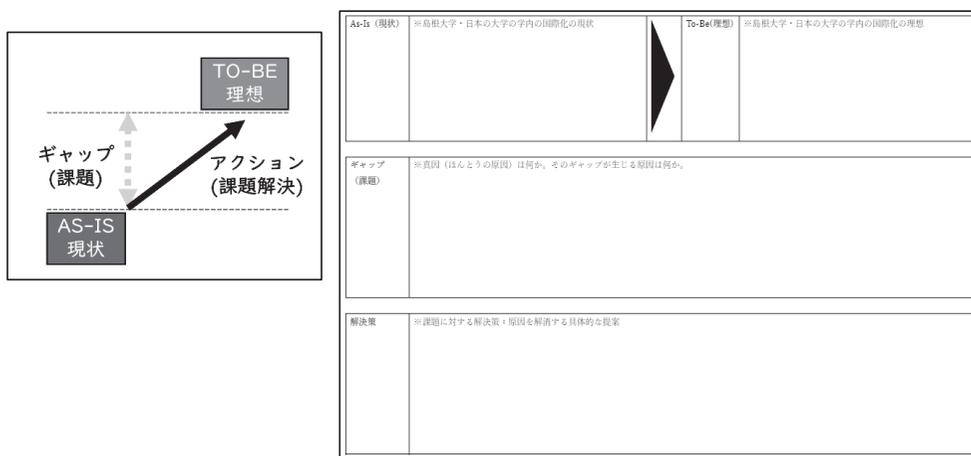
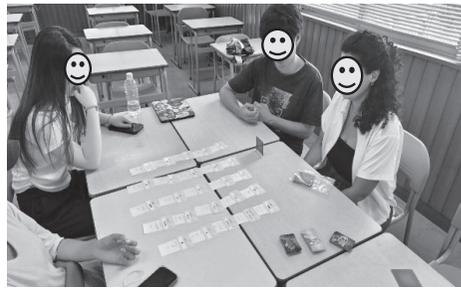


図3 AS-IS/TO-BE分析の枠組みと活動用シート

3.6 各グループの企画と実施

8つのグループは、共通して見つけた中心的な課題、「留学生と日本人学生の交流が少ない」ことを解決するための方策と企画を考え、実行した。方策・企画を内容から分類すると、対面の交流会やゲーム大会などを開催する「イベント系」、留学生向けのサークル案内のパンフレットの作成や、国際交流や留学生に興味を抱くよう、情報を発信するインスタグラムのアカウントを作成し運営する「製作系」、それから、課題の背景をより詳細に調査し、その結果を発表する「調査系」の3種類に集約された。

下は、イベント系の企画を実施したグループの様子である。実施にあたっては、様々な事務手続きや周知、会場準備、進行など、すべて学生たち自身で行った。



【写真：イベント系の企画を実施中の様子】

4. 振り返りの「気づき」から見える成長

これまで述べてきたような活動をとおして学生たちは何を感じ、何を得たのだろうか。授業を全体を通し、リフレクションシート等を利用して振り返りを行った。各段階での振り返りから、学生たちの気づきに見られる成長をとらえていく。

4.1 授業前半での気づき

【初回授業】

- 「今まで海外に行ったことがなかったので、教室に様々な言語が飛び交っていることに戸惑った。グループメンバーは私以外は中国出身だったが私のために日本語で話そうとしてくれた。今度は中国語や英語で話しかけて距離を縮めたい。」(日本人学生)
- 「日本と海外の繋がりが以外なところにあることをグループワークで知り、たいへん面白く感じた。」(日本人学生)

【授業中盤】

- 「自分と似た人とは仲良くなりやすい」という認識がよくあるが、それだけでは真の異文化理解には不十分だと思った。」(留学生)
- 「本当に社会の一員として生きるなら、日常的な社会問題が出たときに、自分なりの考えと立場を持っていることが必要だ。」(留学生)
- 「これから母国で外国人を見たら、他国にいる私と重ねて彼らの寂しさを和らげ助けて

あげる人になりたい。」(留学生)

これらの振り返りから見て取れることは、授業前半において、クラスにいる自分と異なる背景を持つ他者との実際の関わりの中で、自分の立場・態度・視点を客観的に問い直し始めていることである。異文化理解に関する概念的な説明や3.1に示したようなループリックの提示を行う前であっても、教室での交流経験を通して得られた感覚や気づきが、自らの実感を伴った言葉で表現されていた。そしてそれらの振り返りにはすでに、RFCDCに示される態度、価値観、批判的な理解といった要素の芽のようなものが表れていたと言える。

4.2 授業後半での気づき

【Tシャツプロジェクト実施後】

➤「普段は、気軽に留学生に話しかけたいと感じてもどんな目的で接近したのか不審がられると感じ、話しかけることに抵抗を感じていた。しかし、Tシャツを着ていると周りに自分の目的を明示することができるので、話しかけやすいと感じた。」(日本人学生)

➤「正直に言うと日本人学生に無視されたらどうしようという不安があり、自信もなかった。でもTシャツに着替えて、〇〇さんたちが積極的に話しかけている様子を見て「自分にもできるかもしれない」と勇気が出た。(中略)この経験を通して、これからの4年間でもっといろいろな人と友達になれるかもしれない、と前向きな気持ちになれた。」(留学生)

これらの振り返りに示されていることは、留学生からみた異文化間コミュニケーションにおける困難さが、学生自身の日本語力や性格からではなく、相手への配慮から生じていたことである。その障壁を、メッセージTシャツを着ることや一緒に活動しているクラスメートの姿を見て励まされることで乗り越え、自分の行動に変化が起きたことを客観視している。さらには、1回限りの成功体験ではなく、この先4年間続く日本留学における自身の行動の変容につなげようとする姿勢があらわれている。これらの振り返りを、RFCDCに照らすと、態度や価値に関わる要素についての言及が見られたととらえられる。特に、他者にどのように受け取られるかを意識した配慮や、関係が築けるかという不安といった点は、異文化間コミュニケーションにおける相互理解への志向を示している。また、メッセージTシャツプロジェクトで得られた経験が、今後も続く留学生活における人間関係の構築に対する前向きな展望につながっている点は、共生という価値の側面に結びついているといえる。

【最終PBL活動実施後】

➤「疑問を持つこと自体が理解を深める第一歩であり、それが相手を否定することではなく、関心の現れであることに気づいた。」(留学生)

- 「グループワークをスムーズに進めるための具体的なステップがあることを気づかされた。しかし、明確な計画があっても、全員が努力を惜しまなければ機能しない。他人が指示するのを待って受動的になるのは正しいことではない。」(留学生)
- 「授業中は基本的に日本語を使っていたが、母語ではないため、時々互いに何を話しているのかわからないことがあった。その時、みんな根気よく傾聴して内容を確認できた。時間をかければ、コミュニケーションの問題はなかった。」(留学生)
- 「自分は時々英語や中国語で意味がわからないグループメンバーに翻訳した。伝えたいことはやさしい日本語をつかった。」(留学生)

一連のPBL活動を終えたあとの振り返りであるが、これらの記述からは、初期段階から進んで、実際の協働の中で自らが担い手となっている異文化間コミュニケーションがどうすればうまく機能するのか、自分はどんな役割を担えるのか、ということ意識するよう変化していることがみてとれる。コミュニケーションにおいて不具合やズレがあっても、それを直視して対応する態度、すなわち脱中心化や対話的姿勢が育っていたともいえる。また、言語上の問題があれば、自ら考えて解決策を講じ、その行動を調整しながらコミュニケーションを継続させた様子が伺えた。翻訳したり媒介語を使ったりすることで、他のメンバー同士の理解を助けることは、異文化間コミュニケーションにおける「仲介(mediation)」の実践ともとらえることができ、重要な行動ができていたといえる。

4.3 ルーブリックに沿った振り返りにおける気づき

〈他者の尊重の観点について〉

- 「私はこれまで、異なる文化に対する「尊重」を意識してきたつもりだったが、実際に性格が全く違う人と向き合ったとき、うまく接することができなかった。たとえば、いつも黙っているメンバーに対して、心の中で不満を感じてしまった。」(留学生)

〈傾聴・観察のスキルの観点について〉

- 「プロジェクトの進行が遅れ気味になった際など、焦りからか、他のメンバーが話している最中に、結論を急いで発言を遮ったり、自分の意見を被せてしまったりするメンバーがいました。遮られたメンバーは明らかに話す意欲を失い、表情が曇る様子が何度も見られました。」(留学生)

〈その他〉

- 「このルーブリックに基づいて活動することで、ただ他人と会話をするだけでなく、異文化に定着した価値観を受け入れ、多様な背景を持つ人との対話の重要性にも気づくことができた。」(留学生)

3.1で説明したように、学生にルーブリックを提示したのは自身のコミュニケーションや行動の振り返りの足がかりとなるようにすることが目的だった。その結果、行われた振り返りをみると、自身の内面のズレや、集団内で起きたコミュニケーションにおいて感じた

違和感を言語化できており、単に「できた・むずかしかった」というような評価的な判断ではなく、コミュニケーションに対する認識が深化していることがみてとれる。また、相手を尊重することや傾聴の大切さがわかっているにもかかわらず、実際のコミュニケーションにおいてそれができなかったことについて自分やクラスメートを客観的にとらえ、記述することもできている。これらからわかることは、ループリックが、学生たち自身と周囲の態度やコミュニケーション行動についての価値観や視点の提示として機能していたということである。学生たちは、ループリックで示された価値観に共感するとともに、そこで示された視点に基づいて、自身や他者を相対化、客観視できる段階に入っていたことを示しているといえるだろう。

5. 今後の課題・展望

本実践は、留学生と日本人学生が協働して学ぶ国際共修型の授業を通して、異文化間コミュニケーション能力の育成を目指したものであった。課題解決のための協働を終えた学生の振り返りに見られたのは、自分と異なる背景を持つ他者との関わりの中で、自身の態度や行動を問い直し、調整しようとする姿勢が育まれていたことだった。これらは、多文化共生、協働において求められる知識や能力についての理解と共感が得られたこと、そして、自身の協働の体験をループリックをもとに振り返ることによって、実現したと考えられる。この点において、本実践の価値がある。

ただし、本実践は、能力の到達度を測定・評価することを目的としたものではなく、異文化間コミュニケーション能力の育成に向かうプロセスを支える試みとして位置づけられるものである。実践によって能力が身についたかを測定するためには、異文化間コミュニケーション能力をどのような構成要素として捉えるのかを整理した上で、事前・事後の調査や、行動観察、振り返り記述の分析などを組み合わせた評価設計が求められる。これは今後の課題であり、機会を改めて行いたい。

他の課題として、日本人学生の受講者数が極めて少なかった点が挙げられる。本稿ではその要因を十分に分析するには至っていないが、授業の開講時間帯の影響の他に、何らかの心理的負担が影響している可能性も考えられる。今後は、日本人学生にとっても参加しやすい設計や周知の工夫、他科目との連携なども検討する必要がある。

そして、本実践は、大学における「内なる国際化 (Internationalisation at Home)」の一環として位置づけられるものである。日本人学生が留学や海外派遣といった物理的な移動をともなわず、日常的な学習環境の中で多様な他者に関わる経験を提供する点に、本授業にひとつの意義がある。また留学生にとっても、日本人学生はもちろん、母国では出会えないような多様な背景の学生たちとも、日本という留学先で共に学ぶことを通して、固定的な文化理解を越え、相互に学び合う経験をえられる点に意義がある。国際共修授業は、学内に存在する多様性を可視化し、それを教育資源として活用することで、すべての学生に異文化接触の機会をひらく実践の一つである。

今後、このような国際共修授業を学内に広げていくことが重要であると考えているが、

さまざまな制約を考えると、同様の形態の授業を一律に増やしていくことは現実的ではないだろう。本実践を一つの事例としつつ、実施可能なテーマや内容、形態について検討・精査を重ねるとともに、可能であれば学部を越え、異なる専門分野をもつ教員が連携しながら授業を構成していくことも、一つの方向性であると考えている。

本授業については、今後さらに授業設計や振り返り方法の改善を図るとともに、継続的な実践を対象として詳細な分析を行うことで、異文化間コミュニケーション能力の育成過程をより明確にしていきたい。

【参考文献】

- 石崎俊子 (2023) 「ケース学習による異文化間能力の達成度の演繹的分析による検証」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 30、1-15
- 櫻井省吾、宮本真有、近藤行人、近藤有美 (2021) 「欧州評議会の「民主的な文化への能力と135項目のキーディスクリプター」の邦訳」『名古屋外国語大学論集』 8、353-367
- 島根大学「大学教育におけるグローバル化推進のための基本方針」 https://www.shimane-u.ac.jp/introduction/policies_and_initiatives/kyoiku/global.html (2025年12月1日アクセス)
- 中橋真穂 (2025) 「国際共修を通じた学生の学び：テキストマイニングを用いた自由記述による振り返りレポートの分析から」『大阪大学高等教育研究』 14、45-54
- 松田デレク (2024) 「国際共修型授業における受講者の異文化間理解能力の育成に関する一考察」『LOGOS (ロゴス)：群馬大学大学教育・学生支援機構論集』 1、51-66
- Deardorff, D. K. (2006) "Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization" *Journal of Studies in International Education*, 10(3),241–266
- Jones, Elspeth., & Reiffenrath, Tanja. (2018). *Internationalisation at Home in Practice*. European Association for International Education (EAIE). <https://www.eaie.org/resource/internationalisation-at-home-practice.html>(2025年12月1日アクセス)